

「あー、いい天気だねえ……」

今回の時空間旅行先に引っ越してから、三日目の朝。

カガミはベランダから、隣家の庭を眺めていた。

「……ん？」

ふと気が付くと、隣の庭に洗濯物を干している女性がいた。

三十代の前半くらいだろうか。

栗色の長い髪を緩くひとつに結び、淡い藤色のカーディガンを羽織っている。

動作がゆっくりで、どこかのほほんとしていて、一枚のシーツを広げるだけの作業にも丁寧に時間をかけていた。

その手指には結婚指輪らしきものがある。

(いわゆる、おっとり系の人妻さん……ってやつかな？)

彼女が屈んで洗濯かごから衣類を取り出したとき、カーディガンの前が少し開いて、白いブラウスに包まれた豊かな胸のふくらみが強調された。

腰回りも柔らかな曲線を描いていて、スカートの裾から覗く足首は細い。

それを見て、カガミは少しばかり食指が動いた。

滞在先のご近所でたまたまおいしそうな飲食店を見かけて、現地での思い出の一つに食べてみようと思った、くらいの感覚だが。

(どうやって遊ぼうか？)

カガミは手すりに肘をついたまま、彼女が庭仕事を終えて家の中に戻るまでをのんびりと観察しながら、楽しく考えを巡らせた――。

・
・
・

昼下がりに、カガミは手土産を持って、隣家のチャイムを押した。

訪れるための口実だから中身は何でもいいのだが、いちおう、そのあたりの老舗っぽい店で買った菓子折りを入れてある。

「はい、どなたでしょう？」

ドアが開くと、庭で洗濯物を干していた、あの女性が立っていた。

近くで見るとさらに整っている。

丸みのある顔立ち、少し垂れ気味の優しげな目。

薄化粧の肌は、白く滑らかだ。

柊清香（ひいらぎ・きよか）というのが、彼女の名前だった。

「ええと……。今度、隣に越してきた、カガミというもの？　です。一度、ご挨拶をと思って」

そう言ってお辞儀をし、菓子折りを差し出す。

「まあ、引っ越しをされた方ですね。ご丁寧にすみません。柊と申します。よろしければ、上がってってくださいな」

「あ……。そうですか？　ありがとうございます。じゃあ、お言葉に甘えて……」

こちらから申し出る前に向こうから上がっていけと言われて、カガミは少しだけ面食らった。

カガミの外見が無害なただの学生っぽいからか、それとも元々そういう性格なのか、ろくに警戒心も持っていないようだ。

好都合だから構わないのだが、なんとも不用心なことである。

「どうぞ、こちらへ」

彼女はカガミをリビングに通した。

部屋は整然としていて、家具も真新しく、いかにも新婚夫婦の新居といった感じだ。

いま、夫は仕事で不在ですが、と彼女は告げた。

「お一人で、帰りをお待ちなんですか」

「ええ、まあ。主人は帰りがいつも遅いので、今日も夜になるかしら？」

清香はにこりと笑って、紅茶を淹れた。

湯気の立ち上るカップを両手で慎重に運んでくる様子は、どこかおっとりとしていて、時間がゆっくり流れているように感じられた。

カガミは温かい紅茶を一口飲むと、カップを置く。

「すみません、奥さん。こちらへは来たばかりなので、確認しておきたいことがあって」

「確認、ですか？」

清香は小首を傾げた。

カガミはポケットから「催眠クリスタル」を取り出した。

ピンポン玉ほどの透明な球体。

内部で星屑のような、無数の光が明滅している。

「ちょっと、これを見てほしいんです」

「何でしょう、綺麗ですね……」

清香の目が自然とその光を追った。

じきに、その目がぼんやりとしたものになる。

明滅する光のパターンが、彼女を入神状態に陥れたのだ。

「さて……と」

・
・
・

「…あら？　すみません、ぼうっとしてしまって。何の話でしたっけ？」

清香は瞬きをしてから、不思議そうにカガミを見た。

その様子は、一見して催眠クリスタルの影響下に捕らえられる前と、何も変わりがない。

「奥さん、好きです！ 付き合ってください！」

カガミがいきなりそんなことを言うと、彼女はきょとんとして、目を瞬かせ。

次いで、困ったように笑った。

「まあ……いけませんわ。私、人妻なんです。夫を愛していますし……」

一見、当たり前前の反応のようだが、彼女は既に催眠クリスタルによる暗示からの常識書換を受けているのだ。

「じゃあ、せめて中出しハメ放題の肉便器になっていただけませんか？ それで托卵を引き受けて頂ければ、それだけでもいいんです！」

カガミはまるで譲歩しているかのように、とんでもないことを口にする。

普通なら激怒されて殴られてもおかしくないような内容だ。

しかし、清香は小首を傾げて真剣な顔で考え込むように少し黙ったあと、にっこりと頷いた。

「うーん……それでいいんですか？ そのくらいでしたら、勿論、構いませんわ」

「え、本当に？ いいんですか、肉便器ですよ？」

「だって、肉体関係を結ぶだけなら不貞にはなりませんもの。ただの肉便器として精液を受け止めるだけです。それで、肉便器ということになると、ご主人様の赤ちゃんを産むのも、私の当然の役目ということになりますでしょう？」

彼女は、あくまで人の役に立つことを嬉しく思うような、慈母のような微笑みを浮かべた。

常識書換は催眠下の彼女に、都合のいい論理を植え付けていた。

夫以外と情愛をもって肌を重ねるのは不貞だが、肉便器として精液を受け止めるのはただの生理現象であり、その種で孕むのも肉便器となる以上は当然の務め。

だから肉便器になって托卵を引き受けるだけのことなら、何の問題もなく貞淑な妻のままでいられる……という、倒錯した理屈だ。

この理屈の支えがある限り、彼女の貞淑な妻としての自尊心は傷つかないし、罪悪感も抱かない。

「それでよろしければ、寝室へご案内しますわ。こちらへどうぞ」

清香はそう言って、スカートの裾を軽く摘みながら椅子から立ち上がると、寝室へ向かってと歩き出した。

あくまでも自然な動作。

まるで来客にお茶を勧めるのと何の違いもないような、穏やかでためらいのない足取りで。

カガミの常識書換の暗示は、十全にその効果を発揮していた。

彼女にとって、「肉便器になること」や「托卵すること」は、「人助け」や「近所付き合い」の延長線上にある、当然行すべき奉仕行為として認識されているのだ。

それがいかに異常で倫理に反するかなどということは、彼女の思考からは完全に排除されていた。

「さてさて」

寝室に入ってから、カガミは改めて彼女の顔を覗き込んだ。

ベッドの縁に腰を下ろした清香は、静かにカガミを見上げている。

その瞳は澄んでいて、少しの澱みもない。

彼女は本気で、心から、この状況に納得しているのだ。

「それじゃあ、もったいぶらずに始めようかな？」

カガミは彼女の横に座った。

清香の顔が間近にある。

伏せ目がちなその睫毛の長さ、ふっくらとした唇の艶。

首筋から鎖骨へと続く柔らかなライン。

カーディガンとブラウスの上からでもわかる豊かな膨らみ、甘い香り。

「あ……」

清香が小さく声を漏らしたのは、カガミがその豊かな胸をブラウスの上から包み込むように揉み上げたからだ。

「んんっ……」

指先に伝わる感触は信じられないほど柔らかく、それでいて弾力があった。

ブラウス越しでも伝わってくる、その温かさと重み。

カガミの手が、ゆっくりと、しかし確定した意思を持って、彼女の身体を弄り始めた。

清香はされるがままになっている。

むしろ、されることに慣れているような、自然な受け入れ方だ。

夫に愛撫される時と同じように、彼女の身体は、カガミの手に委ねられていた。

カーディガンのボタンを外す。

白いブラウスのボタンも、一つずつ外していく。

現れたのは、レースの刺繍が施された、清潔感のある白いブラジャー。

「綺麗だねえ」

「ありがとうございます。夫以外から褒められたのは初めてですわ」

彼女は恥じらうでもなく、ただ素直に喜んだ。

ブラジャーのホックを外すと、白く柔らかな双丘が揺れてこぼれ落ちた。

桜色の乳首が、ふっくらと膨らんでいる。

カガミはそれを口に含んだ。

舌で転がすように弄りながら、もう片方を指で摘む。

「あ……んっ」

清香の口から、甘い吐息がこぼれる。

彼女のほうもカガミの股間に手を伸ばして、ズボンの上からそっと触れた。

その下では肉棒が既に、硬くふくらんでいる。

「もう、立っていらっしゃるのね」

「そりゃあ、まあね。奥さんのおかげだよ」

カガミはズボンのベルトを外して、前開きを下ろす。

清香は隆起したカガミのモノを愛おしそうに、手で包み込んだ。

「まあ……」

完全に露出したそれを彼女は両手で持ち上げ、頬ずりをする。

「こんなに立派なもの……私のような者の肉便器でよろしいのですか？」

「いやいや、奥さんみたいな人がいいですよ」

「まあ、嬉しいですわ」

清香はにっこりと微笑むと、その先端に唇を寄せた。

舌先で裏筋をなぞり、亀頭を丁寧に舐め回す。

「ん……、ちゅ……」

まるで夫のものを愛おしんでいるかのような、献身的な奉仕。

口腔内の温かさと舌の動きが、カガミを刺激する。

「……んむ……」

彼女は徐々に深く啜え込み、喉奥まで飲み込んでいった。

(わあ、大胆だねえ。思ったより上手だし)

見た目は清楚そうでも、やはり人妻。

その奉仕は、未熟な少女のそれとは違っている。

それなりに経験はあるらしい。

「ん……ちゅば……」

頭を上下に動かす清香の栗色の髪が揺れる。

カガミはその髪を撫でながら、少し腰を揺らした。

彼女は目を閉じ、口いっぱいにかガミのモノを含みながら、一心不乱に舌を動かしている。

その唇と頬とが、カガミの肉棒の形に沿って歪んでいく。

愛する夫のモノだと思って奉仕しているのか、あるいは単に肉便器として刷り込まれた使命感に従っているのか。

いずれにせよ、彼女の背徳的な献身ぶりは悪くない。

「うん、いいね」

カガミは清香の頭を押さえるようにして、さらに深く腰を突き出した。

「んぐっ……！」

清香はわずかに苦しげな声を上げるが、拒絶することはない。

むしろ喉を開き、奥まで迎え入れようと舌を這わせる。

「ん……」

カガミは限界に近いことを感じて、清香の頭から手を離れた。

「ぶっかけてほしかったら、口を離して。飲み込みたかったら、そのまま啜えておいて」

「ん……、ぷはっ……」

清香は一瞬の躊躇の後で口を離し、跪いたまま顔を向けた。

カガミは彼女の意を受けて、射精のタイミングを逃さないように矛先を向け、扱くようにする。

白濁した液体が迸り、清香はそれを正面から浴びた。

「あっ……！」

彼女は顔面に降りかかる熱い飛沫に目を瞑りながらも、抗うことなく受け入れる。

「んう……、熱い……」

陶醉した表情を浮かべている。

精液は鼻梁や頬を伝わり、滴っていく。

唇にも垂れてきたものを、清香は赤い舌でぺろりと舐めた。

「ふああ……、すごい量……濃い……」

「あはは、気に入った？」

カガミは目の前の人妻の淫靡な有様をくすくすと笑いながら、快く眺めやる。

さて、次はいよいよ本番を……と、思ったところで。

「あら……？」

玄関のドアノブがガチャガチャと鳴る音がして、次いでインターホンが慣らされる音がした。

清香が音の方に目を向けて、目を瞬かせる。

「どうしたのかしら。あの人が帰ってきたみたいですわ」

「あの人って、君の旦那さんのこと？」

「ええ……」

最初にインターホンではなくいきなりドアノブを回そうとしたあたりからしても普通の来客ではないだろうし、そうでなくても身内ゆえ、一挙手一投足に伴うちょっとした物音などから識別できるのだ。

彼女は暫時瞬きをしてぼうっととしていたが、すぐに、その顔にハッとした表情を浮かべた。

何か忘れ物でも取りに来たのか、あるいは何かの事情で早めに仕事が終わったのかはわからないが、いずれにせよ、夫が帰ってきたのだ。

「まあ、大変だわ」

彼女は少し慌てた様子で立ち上がろうとする。

もちろん催眠クリスタルの効果で、彼女の中には「よそ様の肉便器になって托卵を受け入れること」へのやましい気持ちや夫への罪悪感は微塵もない。

だが、それはそれとして「夫以外の男との情事を夫に見せること」が彼を不快にさせるだろうというくらいの認識は残っているのだろう。

つまり、清香は不貞を隠蔽しなくてはと思っているのではなく、夫の嫌がることを見せないように身だしなみを整えなくては、と思って慌てている状態なのだ。

「すみませんけれど、カガミさんはしばらく隠れていてくださいます？」

清香はそう言いながら、シーツの端で素早く顔に付いた精液を拭い、乱れたブラウスのボタンを手早く留めた。

豊かな胸元の肌が、再び布の下に隠される。

だが、その白い布地には唾液と精液の染みがじわりと滲み、桜色の乳首が透けて見えそうだ。

彼女はそれに気付く様子もなく、ぱたぱたと足音を立てて寝室を出ていった。

（あはは。あれで気付かれずに済むのかな？）

カガミは慌てるでも、邪魔が入ったことに機嫌を損ねるでももなく、むしろ面白いことになるかもという期待で、目を細めた。

せっかくだから近くで見てやろうと、『多機能型強化服』のステルス機能を使って分の姿を周囲の者から認識されないようにしておいてから、彼女の後に続いて部屋を出る……。

「はい、いま開けますわ」

清香の声が響き、鍵が回って、ドアが開く。

「やあ、ただいま」

「あら、あなた。おかえりなさい」

彼女はにっこりと、自然な笑みを浮かべて夫を出迎える。

「ずいぶんお早いみたいだけど、どうしたの？ 忘れ物でもした？」

体験版はここまでです。

情事の最中、突然帰宅した清香の夫。

妻の異変に気づくのか――。

そしてカガミが夫に植え付ける、新たな“性癖”とは？

続きは製品版

『異界滞在者カガミの改造記録：4

貞淑妻・清香は托卵常識改変に逆らえない』

でお楽しみください！